



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

2020 年の教育講演会の講師が決まりました。2018 年に出版された『ヤングケアラー—介護を担う子ども・若者の現実』の著者である澁谷智子氏（成蹊大学 准教授）です。No.34 と No.35 の Ed.ベンだよりは、その講演会を聞くための視点を検討します。

教育講演会「ヤングケアラーを考える」を聞くための視点として（その1）

背景なき子どもたち……「児童・生徒」

歴史の流れのなかで、今の学校をとらえ直してみる

戦後から 74 年。明治維新から終戦までが 77 年だから、あと 3 年ほどで同じだけの歴史的時間を過ごすことになる。明治維新と同時に誕生した「富国強兵」「殖産興業」の流れは、列強の国に追いつくとばかりに、軍部は強大な力を手にし、企業資本は大陸へと進出した。そしてその帰結が 1945 年の敗戦であった。310 万人ともいわれる多くの犠牲者を出して、明治維新を起点とする流れは区切りを迎えた。

そして、戦後民主国家としての歩みが始まり、もう 74 年！もちろん、その時、日本の新しいスタートだけではなく、世界の新しい枠組みへの模索も始まった。

しかし、74 年後の現在の日本と世界に目を向けてみると、残念ながら閉塞感が満ちている。分断と格差という言葉が世界に広がり、自国中心主義が多くの支持を得る社会状況となった。戦後 74 年。あたりまえと思われていたものの多くが、「無力」になってしまったようにも思う。

民主主義！……民主主義は自由と豊かさの象徴であった。しかし、今本当に民主主義を目指している国はどこなのだろう。強権的で、排他的な政治が世界中で横行する。

自由主義経済！……自由主義経済は、実はそれ自身が、民主的な政治形態との親和性が高かった。しかし、経済がグローバル市場において進展し、また金融経済も国を超えてこれだけ発展すると、逆に「政治」や「国家」の規制は企業の足かせとなり始めている。世界規模での寡占は進み、大企業も生き残りをかける戦いが進行している。自由主義経済の暴走が始まっている。

平等！……これだけ格差が、個人、国、地域の間で進んでくると、権利の平等性という理想さえ、極端にぼやけ始めている。

平和！……??????

さて、こうした流れを確認した上で、日本の学校教育を置いて考えてみる。すると、不思議とこの 74 年、学校としての「かたち」はほとんど変わっていないことに気がつく。ひとりの先生が 40 人近い子どもを相手に、小学校も中学校も、そして高校も一斉授業と呼ばれる形態で、子どもたちは全員で前を向いて先生の教えに耳を傾ける。こうした一斉授業の形は戦前から引き継がれ、ある意味戦後においても「有効」であったと言える。

高齢の方に昔のことを聞くと、大和市でも、戦後すぐは中学校など 2 部制であったらしい。午前中に勉強する生徒が昼に帰り、午後には別の生徒たちがやってくる。まるで、映画館の入れ替え制だ。それでも教室が狭いので、遅れてきた者は廊下からのぞいて授業を聞いていたそうだ。

「戦後国民教育」では、文化国家を支える国民と、復興のための人材の育成が急務であっ

たから、知識や技術を伝達する一斉授業方式は合理的であったと言える。やがて、朝鮮戦争を契機とする岩戸景気によって、日本社会が戦後復興を加速させるようになると、その下支えとなったのが学校教育であった。地方から都市部への労働力の提供は、学校を通してなされたし、産業発展のための技術開発を担う人材も高等教育を中心として担ってきた。

一斉授業方式は、規範をベースに集団を作り上げ、一律に知識を伝達し、競争によってふるいにかけることを可能にした。それは、戦後復興や高度経済成長にある社会的ニーズと、戦前の家制度から脱皮し、勉強さえできればいい会社に入っていい生活ができるという個人ベースの夢が、共に重なり合った地点であったのかもしれない。

しかし現在はどうだろう。上述したように世界や社会が大きく変わりながらも、学校があまり変わらないのであるならば、そこには様々な齟齬が生まれてしまったはずだ。

貧困に由来する家庭間の格差、学力の格差、外国にルーツを持つことによる超えられないハンディ、発達に課題がある子どもたちの増加……。新たな問題は確かに生まれつつある。しかし学校は変わらない。

いや、その時々々の社会状況に教育を合わせるべく、努力は続けてきたはずだ。だって、いつであっても教育改革が叫ばれなかったことはなかったではないか。延々と続く「教育改革」。それはいまだに、社会的ニーズと個人の夢が重なる地点が広がっていると錯覚しているからなのだろうか。過労死直前まで働く人は、豊かになったのだろうか。いい生活はもはや一部のみにしか見ることのできない夢ではないのか。

こうして、学校には大きな不都合が残されたままになった。それは、子どもたちが教室に座った瞬間、それぞれに抱える様々な事情は切り捨てられ、ただ純粹に教育を受ける者としての「子ども像」になりきることを求められることだ。今や、子どもたちは、その生活背景を消去された存在として扱われる。いや、自ら上手に背景を表に出さない子どもだけが、教室にいる権利が与えられると言っても過言ではない。

それは、競争原理を学校の基礎理念としてきた日本の学校が、当然のように迷い込む隘路だ。公平な競争は、同じスタート地点を必要とする。一人ひとりの事情を斟酌していたら、競争は成り立たない。どんな結果であれ、個人の責任に帰することができてこそ「競争原理」なのだ。新たな事情や背景が生まれてこようと、この「公平なスタート地点」という虚構は守られ続けてきたのだ。そして今、この虚構が子どもたちを学校から遠ざけている。子どもたちの教育を受ける権利を侵害しているのは、この「競争原理」なのだ。

戦後の教育実践の中には、それでも子ども一人ひとりの背景からすくい取ろうとする実践も多く見られる。綴り方教育などは、その最たるものかもしれない。もっとも、子どもをその背景からすくい取ることができているから優れた実践と評価されたのかもしれない。

今年の教育講演会で取り上げるのは、そうした子どもたちの背景の一つである「ヤングケアラー」という事情である。様々な家族の形が生まれる中で、見落とされがちな「背景」として講演会を契機に学んでいきたい。



Ed. ベンチャー教育講演会 2020年2月24日(月・休) 13:00~17:00(開場12:30)
ヤングケアラーを考えるー子どもの視点から学校教育を問い直す
講師：澁谷智子氏(成蹊大学文学部 准教授)
大和市文化創造拠点シリウス6F 大和市生涯学習センター601講習室

今回は、子どもの背景と学校教育との関係をもう少し深く考えてみたい。

【理事のつぶやき】消費増税によって軽減策となるキャッシュレス化、マイナンバーの普及によって2021年3月からマイナンバーカードが健康保険証にもなることなど、そのうちスマホ一台あれば持ち歩くものが少なくて済む世の中になりそうだ。ただ、情報セキュリティについて教える立場として、便利なものに手を出していくにつれて個人情報や自分の財産が流出しやすい危険性がある。手を出した後は自己責任。健康保険証となったマイナンバーカードを様々な病院で置き去りにすることはリスクが高いと思うのは気のせいだろうか？(NA)